

近世西班牙國防經濟史概説

室 谷 賢 治 郎

一

海を制する者は世界を制するとは誰が言ひ初めたかを知らないが、世界史を繙く程の者は古今を貫いてこの言葉が事實を謳つてゐることを認めずにはゐられまい。古代羅馬が地中海を湖水とするやうな大版圖を建設した時、海軍國カルタゴの強敵を破るのに一方ならざる苦慮を費したことは、周く知られる所であらう。降つて最近世に於ても英國が渾圓球上日没を見ずと豪語するに至つた根源は、疑もなく七つの海にユニオンジャックの旗を靡せることが出来た點にある。然るに近世初頭、特に第十六世紀・第十七世紀にあつては、英國よりも先に西班牙が東西兩洋に亙り日没を見ざる榮冠を擔つた。近世初頭は經濟史上マーカンチズムの名を以て呼ばれる時期で、西班牙は正しくマーカンチズム國家の前驅者たる活動を葡萄牙と共に示したのである。西班牙の黄金時代に於ける版圖は、歐洲ではイベリア半島（葡萄牙を含む）・伊太利半島の或る部分（ミラノとナ

ポリ）・シシリ島、ネーデルランド（十七州）・フランシスコンテ（獨佛兩國間の若干中間地帯）、阿弗利加ではチュニス・オラン・カナリア諸島・ヴェルデ岬諸島、亞細亞ではフィリッピン群島・モルッカ群島並びに葡萄牙舊領の植民地の大半、亞米利加ではメキシコ・ペル・チリ等に跨り、國王フィリップ二世（一五五六年—一五九八年）が英國女王メリーを后としたといふ關係では一時は英國も西班牙の勢力下に置かれたと見て差支ない。フィリップ自身はマドリッドの宮廷深く書齋に籠り殆ど外出しなかつたにも拘らず、一人靜かに世界に對する政策を畫策指揮し天下の人に怖れられた。フィリップは自ら「彼自らの大臣」であつた¹⁾と同時に、「萬能の神の若き伴侶」と稱せられた²⁾。何れにせよマーカンチズム時代の西班牙は「單なる西班牙」*Las Españas*でなく、「大西班牙」*Las Españas; a Greater Spain*であつた³⁾といふことが出来る。然らばかかる強大國となつた時の西班牙の國防經濟を維持し發展せしめた背景は何であつたか。以下これを歴史的に探求したい。

「第十六世紀に於ける西班牙の經濟的繁榮」の著者コンラード・ヘーブラーに従へば⁴⁾、第十五世末イベリア半島に於てアラゴン國王フェルディナンド Ferdinand とカスチラ國女王イサベラ Isabella とが結婚して西班牙の國を肇めた頃は、經濟も政治も混沌たる状態であつた。農業は衰へ、商工業は頽れ、貨幣は惡鑄せられ、不逞の貴族が跋扈してゐた。然るにフェルディナンドが半島東南部に異教徒として巢喰ふグラナダ國を攻略し、イサベラがコロンブスに援助を與へて新大陸を發見せしめるに至つて後、西班牙の國內は道路橋梁が建造せられ、都市の衛生上の施設が改良せられ、港灣の燈臺が設置せられるやうになり、造船業並びに航海業の發達目覺まし

く、商工業の進展も顯著となつた。混沌たる西班牙の國情は漸次に秩序の曙光を望むに至つた。

第十六世紀に入りメキシコのザカテカス Zacatecas に銀鑛が発見せられ（一五三二年）、ペルのポトシ Potosi に金鑛が発見せられる（一五四五年）や、當時の歐洲人はこれぞ久しく夢想した黄金華咲くユートピア或は El Dorado の出現であるとなし、これを獨占する西班牙に對し垂涎措く能はざるものがあつた。されば西班牙政府が新大陸の植民地へ食糧品を積載して毎年貿易船を派遣し、復航に巨額の貴金屬を滿載して「銀船」「Silver fleet」と化せしめる際には、アンチル諸島に據る海賊 buccaners; bucaniers がこの「銀船」を襲ふことが珍しくなかつた。而も事實西班牙に流入した貴金屬の價額は一四九三年から一五〇〇年までに年平均約三十五萬弗、一五〇〇年から一五四五年までに約三百萬弗に達し、右のポトシ鑛山の開發後は年々一千百萬弗に増加した。⁵⁾ 別な統計によれば、一四九三年から一六〇〇年までの世界の産金高は一億〇三百二十萬磅、年平均は九十七萬磅であるから、⁶⁾ 西班牙の地位は正に貨幣的ヴェスヴィオの噴出を獨り舞臺に享樂する趣があつた。

かくて西班牙では文字通りの一攫千金は通商の制限及び植民地の排他主義を採擇し、採掘業の偏重は保護主義を馴致することとなつた。海外植民地の獲得維持のためには勢ひ強大な商船隊を要し、航海條例を規定し造船獎勵金を交付することも怠るべからざる國策となつた。マーカンチリズムの雛型は立派に出來上つたといつて宜し。

史家ランケの見解では、西班牙が強兵の國となることが出來たのは、莫大な金銀を所有したからであるとい

ふやうに解せられる。彼は論ずらく、「當時は傭兵制度が行はれ、何人が最も多くの兵士に賃銀を支拂ふことができるかといふことが萬事を決してゐたので、従つて西班牙はその歩兵を以て世界中のどこの陸軍にもまさる優越を獲得することとなつた⁷⁾。然るにこのランケの所論にも拘らず、西班牙がピレネー半島の一角に本國を有しながら前記の如き大膨脹を海外の版圖に示した事實に顧るときは、陸軍の強さも去ることながら海軍の偉大であつた點を看過し得ないと思ふ。否、一五八八年英國の海軍によつて撃破せられるまでの西班牙艦隊が自ら無敵必勝艦隊 *Invincible Armada* を以て呼號してゐた史實は餘りにも周知である。即ちマーカンチリズム時代に於ける西班牙の國防經濟は、一方に於て海運並に造船の促進、他方に於て貴金屬の輸出禁止により護持せられたと斷定して憚らないのである。本稿の意圖するところはこの斷定を裏打ちしようとするにある。

- (1) 坂口昂博士著「概觀世界史潮」二八〇頁參照。
- (2) 拙著「商業史大綱」二二五頁參照。
- (3) H. Heaton, *Economic History of Europe*. New York & London, 1936. p. 266.
- (4) Konrad Haefliger, *Die wirtschaftliche Blüte Spaniens im 16. Jahrhundert und ihr Verfall*. Berlin 1888. SS. 6-8.
- (5) W. C. Webster, *A General History of Commerce*. Boston, 1903. p. 126.
- (6) W. T. Layton & G. Crowther, *An Introduction to the Study of Prices*. 3rd ed. London, 1938. p. 247.
拙譯「近世物價史要」二九二頁。
- (7) L. v. Ranke, *Ueber die Epochen der neueren Geschichte*.
鈴木成高・相原信作共譯「世界史概觀」二〇五頁。

抑も西班牙の地たるや、古代及び中世には歐洲商業の重要な兵站をなした。地中海沿岸のバルセロナ Barcelona 港の如きは第十五世紀に至つても尙ほ伊太利のゼノア並びにヴェニスに匹敵する勢力を保ちその商船は埃及のアレキサンドリア港に至る間の凡ゆる地中海港灣と交通した。またヴァレンシア Valencia・カルタヘナ Cartagena・アルヘシラス Algeciras・マラガ Malaga 等の諸港も、第十五世紀の終頃まではゼノア・フロレンス等と盛んに通商を營んだ。然るに古代人の想像した世界の極が「ハーキュリスの柱」Säulen des Herkules; Pillars of Hercules——ジブラルタル海峡を夾む大岩——に存しないことが分明にせられるや、而してヴェニスが毎年大西洋へ商船隊を派遣するに至るや、西班牙のアンダルシア Andalusia 地方の諸港、即ちセヴィリヤ Sevilla・カデス Cadiz・サンルカル Sanlúcar 等は俄然活氣を呈することとなつた。これと同時に西班牙北部のビスケー灣に面するコルナ Coruna・サントンデル Santander・ビルバオ Bilbao・サンセバスチアン S. Sebastian 等の港も英國やフランス地方への仲繼場として新生を謳はれることとなつた。茲にビスケー灣沿岸に於ける造船の活潑な狀況が特に注意せらるべきであらう。但し造船と言つてもその技術又は構造は最近世の産業革命を見ない前の時代のことであるから、この點を謬無きやう説明しなければならぬ。

近世の初頭に西班牙で使用せられた船は“galleon”として知られるもので、これは地中海方面の船と共通の

構造を有した。“galleon”に大砲を具へて海戦に利用したのは、第十五世紀初のヴェニスであつた。然るに大砲の進歩により海戦の性質が次第に變化すると共に、武装商船の必要は海戦にも遠洋貿易にも痛感せられるに至つた。茲に於て“galleon”といふ名稱は武装商船に適用せられることとなつたが、ヴェニスに於ける最初の“galleon”は陸戦の場合河川に使用するため考案せられた船であつた。即ちそれは舷側が高く、唯だ舷側から櫓を突出して漕ぐ點に於てはgalleyと似たものであつた。何れにせよ、第十七世紀に至るまでは“galleon”と船とは構造及び裝備に於て大差が無かつたと言つて宜い。

caraval と呼ばれる船は第十三世紀の頃から葡萄牙で造られ、第十六世紀の初までに特有の形體を整へられ、その後特定部分に改良を加へられた。また carrack 及び nica と名付けられる船も素とゼノア及びフランダース地方で造られて、葡萄牙へ賣られたものである。かく造船術そのものに關する限りはイベリア半島全般に著しい改良は見られなかつた。

然らば西班牙及び葡萄牙に於て造船業が重要となつた根源は何處にあるかと言ふに、その建造し得た噸數に存するのである。ビスケー灣沿岸の地位が仲繼的折衷主義を寧ろ歡迎し、西班牙の貿易狀態が種々の型の商船を却つて要求したと見ることが出来る。然るに西班牙の折衷主義乃至經驗主義は遠洋貿易の新しい問題を解決する上に於て必ずしも十分でなく、第十六世紀の後半から和蘭の制壓を受けることが屢々起つた。仍て西班牙の國會には一五二〇年、一五二三年及び一五五九年に外國製造船の使用禁止に就ての請願が提出せられ、一五

六二年には地中海に面するカタロニア Catalonia 地方で特にビルバオから三百人の職人を有する造船家を招聘して造船所の再編成を実施するやうなことがあつた。⁸⁾ また一五六三年には新大陸との通商に内國製造船の優先權を認める旨の勅令が發布せられ、六百トン *toneladas* ^(註) よりも大なる船の建造には獎勵金を確認し、三百トン乃至六百トンの船に對しても始めて獎勵金を交付することにした。⁹⁾ 茲に於てか西班牙の造船業は少からざる刺戟を受け、一五八三年にビスケイ灣岸で建造の船は一萬五千 *toneladas* を算し、これに次ぐ三年間に王室海軍の造船註文は五十隻の多くに上つたのである。¹⁰⁾

(註) *tonelada* は英國の噸と略ぼ同一の重量單位と解して宜う。*tonelada* の算定は英國の噸より二六%大であると公認されることがあるけれども、その差の十分な説明はないやうである。

然るに第十七世紀に入るに及び、西班牙の造船業は一大危機に直面した。無敵艦隊の喪失は勿論、通商の際に蒙る商船の損害は國內製造船の數量の上に暗雲を投じたのである。即ち新大陸との貿易に外國船の登録せられることが甚だ多くなり、これがため船に關する新な建造規格や新な形體が勅令によつて課せられるやうになつた。例へば船の大いさに就て見ても、從來の長さが幅の三倍乃至三倍半であつたものを四對一に改め、更に五對一に變へた。裝備に關しては、櫓を取外して最近世の帆船に似た外貌を示した。而してこれ等の船の重量噸數は通常四百噸乃至二百噸を算した。尙ほ船尾を圓形にせず方形に改めることが大船の特徴となり、この船型は“*pinnace*”と稱せられた。和蘭の東印度貿易會社が用ひた船はこの“*pinnace*”の種類である。

かくて千二百 toneladas の galleon の建造が企てられ、五百 toneladas 級の船が最も安全であるといふ主張よりも大船主義の論調が有力になつた。これと共に船の大いさ、即ち長さと幅との割合及び床と深さとの割合に一入の苦心が拂はれることとなつた。詳記すれば西班牙の船は第十七世紀の第一季には、長さとの割合が二・九七對一又は三・四六對一となり、上の "pinace" の四・三五對一と對比せられるのである。¹¹⁾ また床と深さとの割合も一・〇六對一又は〇・七七對一となり、"pinace" の一・三四對一と比較せられる。¹²⁾ 兎も角も西班牙としては新興の和蘭の優秀な造船に對抗するのに大重とならざるを得ぬ情勢にあつた。

この間にあつて西班牙の當面した造船上の問題に見逃すことの出来ないものは資材の缺乏である。第十六世紀の末頃までは西班牙の造船材料は檣・桁等の圓材を除き自給し得たけれども、第十七世紀の初には事情は異なり、圓材は固よりのこと、タール、瀝青、大麻(索具用並びに帆布用)、精製帆布等までも國外に依存しなければならなくなつた。造船資材を自給し得た間、西班牙の國防經濟は安定を維持し得たものと言ふことが出来よう。

而も西班牙の造船業を脅すものに新大陸又は植民地に於ける造船の發達があつた。その實狀は左の統計によつて窺知せられる。¹³⁾ 統計はセヴィリヤ商船隊の建造の狀況を示すものであるから、西班牙全體の判斷の資料としては十分でないにせよ、以て有力な競争者の出現を見るべきである。

	西班牙所有船			外國所有船		合計
	西班牙建造	西印度建造	外國建造	西班牙建造	外國建造	
	隻數 トン	隻數 トン	隻數 トン	隻數 トン	隻數 トン	隻數 トン
一五九九年	一八 七、六二五	二 三〇〇	六 二、三三〇	一 一一〇	一六 三、七三〇	四三 一三、九五五
一五九八年	九 二、五五〇	一 二〇〇	二 八五〇		五 一〇、五〇〇	一七 四、七五〇
一六〇〇年	一二 三、〇九〇	六 一、四六〇			七 二、〇三〇	二五 一、一八七〇
一六一〇年	四〇 一八、七八〇	二〇 五、九七五				
一六四七年	三 一、五五〇	七 一、八三〇				
一六四八年	一 四〇〇	六 一、六八八				
一六六〇年	五 一、七八〇	五 一、四八六				
一六八九年	五 一、四六四					

要するに第十六世紀、第十七世紀に於ける西班牙の國防經濟を存続せしめた根基には、右見る如き少からざる困難を伴つたに拘らず、造船業の殷賑があつたことを否定し得ないのである。

さて造船業と關聯して海運業の盛大が近世初期に於ける西班牙の國防經濟を推進せしめた跡を辿るに、先づ西班牙から新大陸へ向け出航した船の統計に次の如きものが見られる。¹⁴⁾

	總數	一年平均	平均トン	一年當トン
一五〇六一一五年	二八六	二八	二〇〇	五、六〇〇
一五一六一二五年	五〇三	五〇		
一五二六一三五年	六三九	六三		
一五三六一四五年	六八五	六八		
一五四六一五五年	七〇二	七〇		
一五五六一六五年	六六五	六六	三三三	二一、〇〇〇
一五六六一七五年	六四九	六四		
一五七六一七九年	一七一	六三		
一六〇〇一四年	二七六	五五	三六〇	一九、八〇〇
一六四〇一五〇年	二七七	二五	三四〇	八、五〇〇
一六七〇一八〇年	一九六	一七	二九六	四、六五〇
次に西印度方面から西班牙の諸港へ入つた船の數字を拾ふと、左の通りである。 ¹⁵⁾				
	總數	一年平均	平均トン	總トン
一五〇六一一五年	二二八	三三	二〇〇	四、四〇〇
一五一六一二五年	二八三	二八		
一五二六一三五年	三六一	三六		
一五三六一四五年	五一〇	五一		

一五四六—五五年	五九五	五九		
一五五六—六五年	五二八	五二	三三二	一六、七〇〇
一五六六—七五年	五三八	五三		
一五七六—七九年	一八九	四七		
一六〇〇—三年	三三九	五六	三六〇	二一、六〇〇
一六四〇—五〇年	二九八	二元	三四〇	九、八五〇
一六七〇—八〇年	一五三	一九	二九六	五、六〇〇

これによつて見れば、アドルフ・ペーアの大著「世界商業史」の中に記されてゐるやうに、「第十六世紀初頭に於ける商船の數は千を算した¹⁶⁾」といふのは過大な評價をなしたもので、實は想像せられる程多くなかつたことが知られる。併しながら當時の西班牙通商の相手は單に新大陸に限られたのではなく、北は佛蘭西・英國に及び、東は伊太利・埃及に延びてゐた事實に顧るときは、遠洋貿易と近海貿易とは優に拮抗する船の數量を示したと言つて宜い。¹⁷⁾ 一五六〇年以降、西班牙では遠洋貿易にも *Tierra firma*——南米、特にパナマ方面——へ向ふ商船隊は *galcones* 新西班牙——メキシコ——へ向ふ商船隊は *flotas* といふやうに特別の艦装をしたから、¹⁸⁾ セヴィリヤに劣らぬ重要港ビルバオへ入つた船の數量並びに種類には次の如き統計が見られるのである。¹⁹⁾ 一五九八年八月から向ふ一箇年の統計である。

	總數			推定重量(トン)		
	西班牙船	外國船	合計	西班牙船	外國船	合計
Nao	101	46	148	30,600	13,800	44,400
Urca	2	30	32	800	12,000	12,800
Pinnace	89	18	107	7,200	1,400	8,600
Volante	6		6	240		240
Zabra	8		8	800		800
Feilbotes		5	5		750	750
Palache	1		1	60		60
Caravel		2	2		240	240
	208	101	309	39,600	28,300	67,900

かくして西班牙の海運業の最盛期を無敵艦隊の潰滅に先つ頃となし、一五八五年となすことが許されるならば、その商船隊は約一七萬五千トンと推定することが出来る。左記のこれより稍早い一五七〇年に於ける歐洲諸國の船のトン數と比較して、その卓越した地位を認むべきである。

和蘭	二二二、〇〇〇トン
獨逸	一一〇、〇〇〇
佛蘭西	八〇、〇〇〇
英國	四二、〇〇〇

特に英國との比較に於て觀察するときは、西班牙が成人で英國が小兒であるとの印象を受けるであらう。英國では一五七二年に五〇、八一六トン、一五八二年に六六、八二七トンの船を有する程度であつた。²¹⁾

- (8) A. P. Usher, "Spanish Ships and Shipping in the Sixteenth and Seventeenth Centuries". An Article in "Facts and Factors in Economic History". Harvard University Press, 1932. p. 193.
- (9) Ibid.
- (10) Ibid. p. 194.
- (11) Ibid. p. 202.
- (12) Ibid.
- (13) Ibid. p. 204.
- (14) Ibid. p. 206.
- (15) Ibid. p. 207.
- (16) Adolf Beer, Allgemeine Geschichte des Welthandels. Abt. I. II. Wien 1860-62. S. 141.
- (17) K. Haebler, op. cit. S. 56. 參照。
- (18) F. F. Heckscher, Mercantilism. Vol. I. London, 1935. p. 343.
- (19) A. P. Usher, op. cit. p. 210.
- (20) Walther Vogel, "Zur grosse der Europae ischen Handelsstötten im 15, 16 und 17. Jahrhundert", S. 331 in Forschungen und Versuch zur Geschichte des Mittelalters und der Neuzeit. Festschrift Dietrich Schafer. Jena 1910.
- (21) A. P. Usher, "The Growth of English Shipping, 1572-1922". Quarterly Journal of Economics, Vol. XLII, p. 467.

三

マーカンチリズムの風靡する中に西班牙の國防經濟を確立した要因として、貴金屬の輸出禁出を數へることは貴金屬即貨幣或は貴金屬即富と考へられてゐた時代には決して不當の處置ではない。アダム・スミスがマーカンチリズムの理論と實際とを論じた際に、如何に注意深く貴金屬又は財寶の問題に觸れたかを顧慮すべきである。近世の初頭には貴金屬の禁輸は經濟上の勢力を増進すると同時に武力を強化する上に於て、即ち國防經濟を樹立する上に於て、欠くべからざる手段であると見られたのである。否、少しく遡つて中世の末葉に眼を移しても、貴金屬の輸出を國法を以て禁止してゐる事實に屢々出逢ふのである。フェルディナンド王並びにイサペラ女王（一四七四年—一五一六年）の統治に至る前に、既に右の如き禁輸の法律に違反する者は嚴罰に處せられ、甚しきは死刑に處せられることもあつた。

いま姑く第十六世紀に入つてからの貴金屬禁輸に考察を限るとせば、一五一五年フェルディナンド王は禁輸違反者を港灣及び市場に召喚すべきこと、信賴するに足る役人を税關監督官に任命すべきこと、少くとも四箇月に一回外國爲替を扱ふ銀行家及び商人に帳簿檢閲を求めて貨幣の輸出無かりしことを王吏に納得せしめること、國內の役人が正貨輸出者の氏名、その金額、輸出した港灣を確認し報告すべきことを等を命じた。²³⁾ 次いでチャールズ五世の時代（一五一六年—一五五六年）にも金銀の禁輸に關する勅諭は屢々降り、一五五二年の法

律は檢舉を免除する代りに、報酬として犯罪の報告者に沒收財寶を與へることとした。更に一六〇六年には貴金屬の輸出に八%の課税をなし、その違背に就ての裁判權はこれを宗教審問 *Inquisition* の法廷に委譲しては如何かといふ請願を出す者さへ國內の主要都市に現はれた。²⁴⁾ その論據はかかる違背が加持力教徒の敵を強大ならしめるといふにあつた。

然るに事實上フィリップ三世（一五九八年—一六二一年）及びフィリップ四世（一六二一年—一六六五年）の時代に過度のインフレーションにより、且つ西班牙の物價と他國の物價との不均衡により、金銀の流出することが甚しく、これと共に他方亞米利加からの貴金屬の流入することが漸く少くなるや、茲に救済手段は焦眉の要求となつた。仍て一六二四年フィリップ四世は金銀の輸出に對しては勿論、輸出の仲介又は補助、役人の違背默許に對しても死刑及び財産沒收に處することに決定した。而してこれ等の處罰でも尙ほ有效ならざることが知られたから、一六二八年には更に苛酷な手段に出た。即ち、密貿易に對しては犯罪者を柱に懸けて火灸りの刑に處し、その子供達を一定の地位及び采邑に登用しないことにしたのである。²⁵⁾

右の如き情勢の下にありながら西班牙の王室は羅馬教會の騎士團長たる職 *Grossmeisterum* を買取らんがために、夙くから自らは巨額の債務を負つた。例へばチャールス五世の如きは、フッガー家 *Fuggers* から五十四萬三千フロリン、ウエルザー家 *Welsers* から十四萬三千フロリン、その他フロレンス及びゼノアの富者から十六萬五千フロリンを借入れたのである。²⁶⁾ 而も西班牙王室は佛蘭西、伊太利、フランダース地方との軍事

的衝突のため多額の經費を要し、その都度外國の資本家に金融を頼んだ。かかる場合、歐洲諸國の銀行家の援助を求め海外駐屯の軍隊を維持するためには、先づ以て貨幣輸出の莫大な免許を與へる必要に迫られた。固より右の如き特權に對しては激しい不平が國會からも社會改革論者からも出た。貴金屬を回收する許可が一般公衆の利益に反するものであることは、自由に論議せられ且つ廣く信ぜられるところであつた。併しながら如何に國會で抗論があつても、上の許可は欠くべからざるものであるといふ巧妙な字句と、許可を制限するといふ懷柔的約束とが與へられるだけで、實は毫も改められなかつた。仍て國會は千八百萬デユカットの課税を條件として、王室に貴金屬輸出を許可せぬこと、信用授與者に對する許可を制限すること、許可期間を六箇月に限定すること等を約束せしめた。²⁷⁾かくして漸く許可は大藏省參議會にのみ制限せられ、その額も外國融資の五〇%に限定せられるに至り、許可を受ける者の氏名、許可の理由、期間、讓渡禁止、輸出港等が凡ゆる許可狀の記載事項となつた。これが有效となるや許可は放棄せられ、税關吏は大藏省參事會に二年一回の報告書を提出することとなつたのである。

さて既に記した通り、西班牙では新大陸に於て植民を開始した時から金銀鑛の開発に意を用ひ、これがため原住民及び移民に對し鑛區の財産を保障し、負債の差押にも道具や施設は除外し、王吏をして邊鄙な鑛山地方の給與を擁護せしめるなどした。併しながらメキシコやペルの如き遠隔な El Dorado はそれ自體では到底マ—カンチリストの夢想を實現し得るものでなかつた。要は財寶がイベリア半島に居くことであつた。この目的

を達せんがために亞米利加の鑛口からイベリア半島の一角に地金を齎す一切の工夫が、政府の嚴重な監督に委ねられ、他國へ流出することのないやうな手段が採られた。即ち少くとも法制上は外國人は西印度との通商を禁ぜられ、内國人の移民すら王室の許可狀によつて管理せられた。またペルの財寶がブエノスアイレスを通つて他國へ輸出されるのを防止しようとして、ブエノスアイレスと西班牙との通商を制限し、同時にブエノスアイレスとペルとの通商をも制限した。ラプラタ河一帶の豐潤な地域の開發の如きは却つて閑却されるといふ状態であつた。それにも拘らず右の如き手段は商務省及び商業ギルドが強力に支持し、フィリッピン二世に至つてはペルと東洋特にフィリッピン群島との通商を禁止し、メキシコからフィリッピン群島へ至る噸數、積荷、金銀等を制限し、他方東洋物產のペル輸入を杜絶せしめ、ペルとメキシコとの通商を著しく縮少せしめた。尙ほ外敵や海賊から財寶を保護するため、第十六世紀の中葉には護衛艦隊を附けることを常としたのである。

唯だ茲に注意を要するのは、一五五二年以降新大陸からの地金の流入が西班牙をして貴金屬の流出に對し無關心たらしめ、金銀複本位の比率及び貨幣統制に就て何等の考慮も施されなかつたといふ説の當否である。併しながら西班牙、就中カスチラでは屢々複本位の比率、重量、品位、鑄造税等を改正し、惡質の外國貨幣の輸入を禁止した事實があるから、貴金屬の流出を阻止したことは蔽ひ得ないのである。否、第十六世紀及び第十七世紀を通じて西班牙國會の貨幣に関する請願の四分の三は、貴金屬の禁輸を目標とするもので占められたといはれる。²⁸⁾

翻つて國內産業の保護に就て西班牙の國防經濟體制は如何なる面貌を示したかを見よう。この點西班牙では夙に第十四世紀の頃から、外國商品にして國內産業と競争し壓迫する恐れあるものを輸入せしめないやう圖り、酒・生絲・羊毛等がその指定を受けた。また製造の最終過程と扞格せしめないやうに、織物ならば紡績よりも仕立に省慮を加へ、フィリップ四世の如きは一六二三年に各種の精製品の輸入を制限した。³⁰⁾重要原料の生産に就ては國內製造の利益を慮り、輸出を禁止することとし、チャールス五世の時代までにその品目に數へられたものには亞麻・大麻・毛皮・鞣革・生絲・鐵鑛・鐵等があつた。更に植民地に對してはブラジル蘇木・毛皮・羊毛・洋紅等を本國へ積送するやうに命じたけれども、それ故に保護關稅を課さなければならぬといふ程の問題は發生しなかつた。

按ずるに西班牙のマーカンチリストは貴金屬の流出する原因を外國爲替相場の變動に歸せしめることを知らず、一般公衆も人爲的爲替對策に乗出す術を覺らなかつたものの如くである。されば西班牙の物價と他國の物價とが甚しく不均衡となつても手形による國際支拂を殆ど利用せず、爲替相場を維持するに常に正貨輸送點を以てした。加ふるに西班牙で第十六・七世紀の經濟上の文獻としては實務家の著作に成るものは甚だ少く、僅かに貴族僧侶の中に斷翰零墨を見出すのみであつた。僧侶にしてマーカンチリストたる者も歐洲諸國の財政經濟に曉通したといひ難く、その天職から推して複雑な爲替知識を修得する暇が無かつたといふのが寧ろ眞實に近いであらう。併しながら茲に一人貿易權衡説を吐露しつつも西班牙の貴金屬を蓄積しようと努めた者が現は

れたことは特に注目に値する。一五五八年三月一日フィリップ二世に一書を献じたルイ・オルチツ Luis Ortiz がこれに他ならない。

オルチツの貿易權衡説の要は下の如くである。³¹⁾ 彼は先づ西班牙及び西印度の原料品が他國人に僅か一デユカットで買取られながら、それが製品として十デユカット乃至百デユカットで西班牙人に賣込まれてゐる事實を見て、西班牙が他國からの物笑の種であることを痛感した。仍て彼は製品の輸入と原料品の輸出とを禁止したいと望み、その實施までに四年間の猶豫を與へ、その間は原料品の輸入に對しては五%、輸出に對しては二〇%の課税をなすべきことを提唱した。外國製品の輸入は専ら再輸出のためにのみ許可すべきこととした。而して貴金屬の輸出を防止するためには、オルチツは國內の不毛の東北海岸に穀物・橄欖油・肉・酒等を提供し、成るべく樅を植付けるやう奨勵した。樅の實が養豚用肥料となり、やがて豚肉を他國から輸入せず済むであらうと考へたからである。彼は外國圖書購入のため西班牙が失ふ正金を一年約二十萬デユカットと計算し、世俗の圖書の輸入を禁止し宗教書の輸入も成るべくは抑制するやうにと國王に進言するところがあつた。他方、養蜂の奨勵によつて臘輸入のため支拂ふ五十萬デユカットを填補し得ると考へ、養蜂箱を二十以上有する者を表彰すべしと論じた。オルチツはまた紙及麻の輸入に二百萬デユカットの出費あることを惜み、その原料たる亞麻及び大麻の栽培を力説することを忘れなかつた。進んで西班牙の重要物産が他國にとつても不可欠のものである點からして、彼は禁制が吸収すべき他國からの利益を原料品に就ては約百萬デユカット、製品

に就ては八百萬乃至一千萬デユカットと推定してゐた。法王廳への貢納金を控除しても、西班牙は他國から五百萬デユカットは收納し得る見積りであつた。オルチツの欲望は實にメキシコやベルの金銀のみに止まらず、爾餘の諸國の貴金屬にまで擴められてゐたと言つて宜い。彼は貴金屬の限りなき蓄積と貨幣數量説との兩立し難きことを認めずに、貿易權衡さへ有利となるならば西班牙の法外な物價は低落するに至るであらうと主張した。併しながら彼は徹頭徹尾貴金屬を高く評價し、これを蓄積しようと望んだのではない。國民の生産力を直接昂揚するための經濟計畫の一斑が彼の主張の中に窺はれるのである。例へば彼は十才以下の男子には文學、商業又は工業を修得せしむべきことを強調し、十八才に至つてもこの條件に適合せず且つ筋肉労働にも従事せざる者は市民權を剝奪すべしとまで極論した。尙ほ風景の美を致し絹織業を促進し森林濫伐を緩和するためオルチツは國道に沿ひ桑及び胡桃の樹を植ゑしめ、紛挽場及び國內排水溝の改良計畫を樹てた。

オルチツのかゝる經濟計畫が全面的に且つ恒常的に遂行されたならば、第十六・七世紀の西班牙國防經濟は略ぼ完璧を期し得られたであらうが、事實は然らずして早くも第十七世紀には西班牙經濟の破綻が萌した。一六一九年にサンコ・ド・モンカダ Sancho de Moncada がオルチツの輩に倣うて貿易權衡の逆調による貴金屬の喪失を計慮し、製品輸入と原料品輸出とに對する禁止を主張し、以て商工業の惰眠を警醒したけれども、俗耳には受入れられなかつた。唯だモンカダにあつても貨幣の限りなき蓄積と貿易權衡の順調との二律背反が認知せられなかつたことは注目を逸してならぬところである。

國防は富裕よりも遙かに重要であるが故にこそ賢明であるとアダム・スミスが稱揚したところの航海條例は、西班牙に於ても古くは第十三世紀の初からカタロニア地方で制定せられ、他國船に對する差別待遇を敢行し來つた。而して西班牙の航海條例は輸送補助金を與へ、造船獎勵金を出した等の點に於て積極的な活動を見せたものである。第十七世紀の初頭に和蘭の海運・造船が目覺ましく興起するや、フィリップ三世は西班牙及び葡萄牙の港灣を和蘭船に對して閉鎖し、和蘭を驅つて東印度諸島に向はしめる動機を與へるやうなことをなつた。

畢竟するに近世初期の西班牙國防經濟は、假令實際と理論との間に矛盾撞着があつたにせよ、貴金屬の輸出禁止或は保有獎勵に依存する一面があつたことを見失つてはならないのである。

- (22) Adam Smith, *Wealth of Nations*. Bk. IV, Chaps. i-iii, vii-viii.
- (23) Earl J. Hamilton, "Spanish Mercantilism before 1700." *An Articles in "Facts and Factors in Economic History."* Harvard Univ. Press, 1932. p. 217.
- (24) *Ibid.* p. 218.
- (25) *Ibid.* p. 219.
- (26) R. Ehrenberg, *Capital and Finance in the Age of the Renaissance*. (Transl. by H. M. Lucas, London, 1928.) p. 77.
- (27) E. J. Hamilton, *op. cit.* p. 210.
- (28) W. A. Shaw, *History of Currency*. London, 1896. pp. 110-111. 參照。
- (29) E. J. Hamilton, *op. cit.* p. 225.

(30) Ibid. p. 226.

(31) Ibid. pp. 230-233.

四

然るにさしも富強を誇つた大西班牙王國も第十七世紀後半に及んで漸次に内外共に崩潰の運命を辿ることとなり、その光景は史家の眼を牽くものがある。ランケに聽かう。「第十七世紀の後半になると、最早この國は完全に無能力となり、大スペイン王國の、あの一碎片、非常な努力を以て本國の支配を脱したあの一小國、即ちオランダが他に先んじて通商貿易の活動を國家生活の一契機とすることによつて、舊本國を凌駕する強力さを贏ち得るやうになつた。³²⁾」バツクルに就かう。「第十七世紀後半に至つては、事態は益々惡化し人民の窮狀は筆舌の及ばざるところとなつた。首都マドリッドの郊外の村では、住民は文字通り餓死した。食物を蓄へてゐる農民はこれを賣ることを拒んだ。金も必要であつたが、自己の家族が周圍で死に行くのを見るのは一層恐ろしかつたからである。(中略) 同様の困窮は西班牙全土に瀰漫した。嘗ては富み榮えたこの國も、僧侶牧師等の烏合の衆を以て満たされ、彼等の飽くなき貪慾は、尙ほ僅かに残つた富源まで收奪したのである。かくて殆ど一文無しとなつた政府は遂に國資を得る途を失ふに至つた。この不足を補ふ必要上、徵稅吏は無暴の限りをつくした。彼等は寢臺その他一切の家具を押收したのみならず、家の屋根を剥ぎその材料を賣つて、携帶し得

る品物と換へた。随つて住民は逃亡せざるを得ず、田園は荒蕪に歸し、食に糧無く宿るに家無く雨露に屍を曝すものは算ふべからず、村落は空虚となり、都會でも第十七世紀末に及ぶ頃には戸數の三分の二は全く跡を留めざる有様となつた。³³⁾」

かくの如く西班牙の近世國防經濟は云はば槿花一朝の夢と消えたが、その不備欠陥は奈邊に存したか。これを検討することには甚だ重大な意義があると思ふ。

私見によれば西班牙の國防經濟には全體性に於て欠くところがあつた。成る程既述の如き海運、造船、通商の發達は斷然地を抜き一時は他國の追隨を許さなかつた。併しながらこれ等の發達は部分的局部的であつたがために、久しきに亘つて持續することが出来なかつたのである。所謂計畫造船若しくは計畫貿易の實施無くしては、國防經濟は全きを得ざる事實を歴史的に示すものが近世初頭の西班牙であると言つて宜い。

これを別言すれば、西班牙の國防經濟は物資と資金とに於て豊富を示したけれども、人材に於て貧困を告げた。上記の造船の殷賑、貴金屬の保持は國防經濟に寄與すること少からざりしは論を俟たないが、結局に於て國防經濟を促進し必成するのは人間の勤勞でなければならなかつた。第十六・七世紀に於ける西班牙の人物に英主賢臣が輩出しなかつたといふのではない。チャールス五世にしてもフィリップ二世にしても、當時の歐洲に於ては不世出の英主であつたことは疑を容れない。臣下にも文武兩道に傑出した者は雲の如く起つた。不巧の名作「ドン・キホーテ物語」を残したセルヴァンテス (Cervantes) の如きは一身を賭して祖國のために戦つた

者であり、その他カルデロン Calderon、ロペ・デ・ヴェガ Lope de Vega 等の文豪が何れも武將であつた事實を想ひ起すことが出来る。然るに眞の意味に於ける富國強兵は財貨の饒多にあらず、金銀の蓄積にあらず、人間の勤勞にあることを認識する經濟學者が西班牙に乏しく、随つて一般公衆も思を茲に致さなかつたことは何よりも致命的欠陥であつたと言はなければならぬ。

近世西班牙の一般公衆は類稀なる忠節を王室に献げたが、同時に迷信的感情を宗教或は教會に對し抱いてゐた。宗教裁判に於ける嚴格が世俗の裁判を凌駕する場合が少くなかつたからであると云へるが、併し科學的精神の尙ほ禁壓されてゐた中世期の餘波を蒙つてゐたものとも云へよう。何れにせよ西班牙を興隆せしめた原因も衰頹せしめた原因も、右の忠節と迷信との二要素の結合であると論斷するのはバツクルである。³⁴⁾この所論を更に一步進めて説くとすれば、經濟生活に於て消費に重點を置き生産に增強を向けざることとは國家を危殆に陷れるものであるとの學說或は思想を敢然唱導する者が西班牙よりも他國に現はれ、他國に一大啓蒙運動を起しつつあつた際に、西班牙は舊態依然盲目的な營みを續けてゐたのである。固より西班牙經濟を破滅に導くべき個々の具體的欠陥を指摘した愛國者は當時居らなかつたとは云へまい。例へば古代羅馬を經濟的に滅亡せしめるに至つた要因としてのラチフォンディア Latifundia を始め、長子相續制、永代寄附、流浪民、森林濫伐、僧侶の過剩、勤勞の賤視、莫大な喜捨、重税、休業日の頻繁等が一部の識者によつて斷片的に指摘せられたものの如くである。³⁵⁾併しながら國防經濟興亡の岐れ目を認知せしめるに足る眞摯な政治經濟學者、社會的弊害を醫する力を備

へた健全な道德哲學者が第十六・七世紀を通じて西班牙から生れなかつたことは歴史的反省に値する「所與」或は「課題」と見る他はない。

以上の如くして第十七世紀末に至り、新大陸の貴金屬の流入と西班牙の歐洲制覇との間に存する相關關係を凝視しつつ新に國防經濟體制の一原型を創建したのは佛蘭西であり、ルイ十四世及びコルベールの偉績がこれであつた。³⁶⁾ また第十六・七世紀に於ける西班牙の物價暴騰に鑑み素朴な貨幣數量説を一擲して徹底せる貿易權衡説に移行し、以て帝國主義經濟學説を樹立したのは英國であり、道德哲學並びに政治經濟の大學教授アダム・スミスの研鑽がこれであつた。

(32) 鈴木成高・相原信作共譯「ランケ世界史概観」二一八頁。

(33) H. T. Buckle, History of Civilization in England. Vol. II. (The Silver Library.) London, 1908. pp. 504-505.

(34) Ibid. p. 461.

(35) L. Cossa, An Introduction to the Study of Political Economy. (Engl. transl. by Louis Dyer. London, 1893.) Historical Part. Chap. II. § 3.

(36) 拙稿「國防經濟の歴史的考察」商學討究第十六卷特輯「戦争と經濟」所收參照。

——昭和十七年十一月十五日——